考古学研究所アルカ提供

アルカ通信
ARUKA Newsletter
Archaeological Laboratory,Co.,Ltd.
NO.254
2024.11. 1

＊考古学研究所（株）アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器 ―『日本先史土器図譜』と現在―

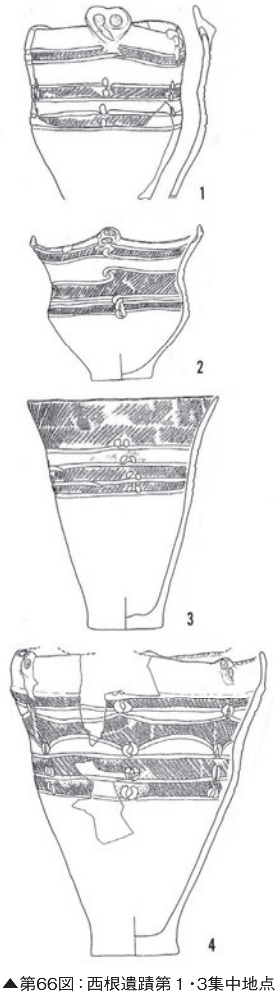
鈴木 正博

● 第60回 ●「加曾利B1式」直後の濫立分岐

【承前】 陸平貝塚の「**入組（如意形）鈎文**」は、『**図譜**』「**B1式**」の「**道統**」として「**加曾利B1-2a式陸平類型**」と命名され、他にも斜行する同様の意匠が**（浅）鉢に展開**する等安定性が示される。この「入組（如意形）鈎文」は、常南総北から遠い鎌倉市**東正院遺蹟（相模）の深鉢**にも及び、下総方面と京葉方面の夫々の**異質な文様帯が混交**（「**文様帯クロス**」）し「**文様帯ブランチ**」となる「**加曾利B1-2a式東正院系列**」（**文献（1980b・1986）**）としても知られている。しかも波頂部口縁下の空間に「**入組（如意形）鈎文」を一文字に挿入**する作法は在地系列には見られず、下総方面からの影響が浮上する。この陸平貝塚と東正院遺蹟の「**新しい比較研究**」により「入組（如意形）鈎文」は系列間を跨ぐ役割である「**交差文様鍵**」となり、その年代は『**図譜**』「**B1式」直後階段**に比定される。

さて、第56回から徐々に『**図譜**』「**B1式」直後階段**が論じられ、本来の筋立てであれば「**加曾利B1-2式」概論**から始めるべきであるが、ここでは『**図譜**』「**B1式」直後階段として連続する「文様帯シーケンス」となる「道統」の型式学**を優先し、この解説を進める。具体的には「B1e式」を伴存する西根遺蹟地点別出土土器群から『図譜』「B1式」直後階段の「道統」へと「文様帯シーケンス」を延長すると共に、「**道統」とは異なる「文様帯ブランチ」も併せ導出し、濫立の中核**に迫る。

第66図は西根遺蹟**第１・3集中地点**（１・２・3は第1集中地点、4は第3集中地点）出土の**深鉢「範型」**（紙面の制約から鉢は省略）で、『図譜』「B1式」直後階段（「**加曾利B1-2a式**」）の文様帯各種である。「B1e式」までの体部文様帯は「**平行線的な磨消縄紋」による「横帯磨消縄紋」**が特徴となり、続く『**図譜**』「**B1式」直後階段での真正な継承文様帯を「下総系列」**と改めて命名し直すならば、先ずは3単位小波状口縁深鉢の第66図1が射程に入る。「B1e式」では口辺に括れが出現するが、それより下降して体部に括れを有する形態となる。体部文様帯は「B1式」の「横帯磨消縄紋」による構成を継承、区切り文も付されるが、「B1式」とは施文部位が異なり、括れ部を中心に上下の頸部や膨らむ胴部にも展開する構成が顕著である。口縁部も「横帯磨消縄紋」で、その上の波頂部突起も「**横霊芝形**」から凹点面形態へと変化する。因みに「下総系列」は「加曾利B1-2a式陸平類型」の如く表記を省略する場合もある。



▲第66図：西根遺蹟第１・3集中地点の「B1e式」直後階段の文様帯

４単位小波状口縁深鉢の第６６図２も「**下総系列**」の仲間。口縁部・頸部・胴部に広狭の「横帯磨消縄紋」が施文、1よりも強い括れ部は横帯区画の上界部となり、波頂部の位置に「**陸平類型**」と同時期に広域展開する「**入組（如意形）鈎文**」が挿入され、波頂部の突起は小さい凹点形態となる。

第66図3は「**下総系列」と「文様帯ブランチ」関係**を構成する平縁深鉢。外傾する**口縁部縄紋帯**、その直下に**無文帯**、続いて僅かに膨らむ**胴部に「横帯磨消縄紋」**を配する新たな文様帯が独得で、**文献（1980b・1981）**にて「**中妻系列**」と命名し、『**図譜**』「**B1式」直後階段から常南総北を中心として広く展開する**。最古の形態は体部が殆ど膨らまず、区切り文も簡素となる。

3単位小波状口縁深鉢の第66図4は「**加曾利B1-2a式東正院系列**」を生成する本体。口縁部と膨らむ胴部が「横帯磨消縄紋」となる「**下総系列**」、外傾する頸部は「**加曾利B1-2a式小仙塚系列**」の「**文様帯クロス**」関係で、新たな「**文様帯ブランチ**」を構成する。即ち、**磨消縄紋の「横連対弧文」**が「**小仙塚系列**」の頸部文様帯、口縁部から頸部までには**文献（1981b）**で「**縦連切線対弧文**」と呼ぶ**小形の「縦連対弧文」**が区切り文となる。船橋市古作貝塚例が著名で、これより古式の文様帯は未明。

畢竟、**西根遺蹟の深鉢「範型」による『図譜』「B1式」直後階段（「加曾利B1-2a式」）**は、「道統」の「下総系列」を核とし、新たな「文様帯ブランチ」として常南総北を中心とする「中妻系列」、及び武蔵方面の「小仙塚系列」と「文様帯クロス」関係にある「東正院系列」等、**各種系列の濫立による多様な連絡・交渉が措定されるものの、『図譜』「B2式」とは連絡・交渉も伴存もしない。**

尚、第１・2集中地点では**（浅）鉢「範型」**にも深鉢「範型」と同様な濫立傾向を観、取り分け「下総系列」が充実するのは、**文献（2003）**の「横帯磨消縄紋」解説に典型を観る。「陸平類型」も斜行の「**入組（如意形）鈎文**」例がある。濫立する「文様帯ブランチ」には「中妻系列」の発現期に比定される鉢、加えて交点が口縁部側に付される「**弧線連繋磨消縄紋**」の椀形も大森貝塚例と共に「小仙塚系列」との関係が示唆的である。振り返って**文献（1981b）**では「**弧線横帯磨消縄紋**」の鉢が「B2式」図版中にも2例（260・261頁）見出されており、「**加曾利B1-2式石神台系列**」と訂正する。

※巻頭連載は隔月です。次回は大村裕さんです。

目　次

■加曾利B式土器　「加曾利B1式」直後の濫立分岐（第60回）鈴木正博 …1
■考古学の履歴書　私の考古遍歴（第12回）　工楽善通 …2
■リレーエッセイ　マイ・フェイバレット・サイト（第246回）　林 順 …3
■考古学者の書棚　『復元イラストでみる！人類の進化と旧石器・縄文人のくらし』麻生順司 …4

考古学の履歴書

私の考古遍歴（第12回）

工楽　善通

1970年代の後半に入って、長野県飯田市の恒川（ごんが）遺跡で、市を南北に通過する国道バイパス（座光寺バイパス）路線の新設計画がもち上った。この地域では従来から表面採集で多くの遺物が存在し、遺跡の範囲は定まらないが、古代の重要な遺構があるだろうと考えられていた所である。そこで県・市・国道工事事務所・下伊那考古学会がその調査と保存に関して再三にわたる協議を重ねた結果、予定路線の発掘調査を始めることになった。その予備調査は、一辺10m余の奈良時代の竪穴住居跡から「和同開珎」の銀銭が出土し、また、小規模ながら掘立柱建物が見つかるなど、一挙に注目を浴びることとなった。

恒川遺跡はその立地から、伊那郡の郡衙跡であるとこれまでより考えられてきた。飯田市教委の文化財係には、当時採用されたばかりの小林正春さんのみの在籍で、長期化するであろう発掘調査に対応できないことから、奈文研に調査員の派遣を求めに来たのであろう。福岡県小郡遺跡で官衙遺構の発掘経験がある私が行くことになった。1978・79年のことである。私は恒川遺跡の発掘に参加するにあたって、予備知識を得るため、長野市の笹沢浩さんに電話して色々と教えてもらった。そして私が現場へ到着する日には、そこで会ってまた話ししましょうと言うことになった。笹沢さんは当時恐らく阿久遺跡の発掘現場から抜け出して来てくれ、和同銀銭の出土した住居跡上で詳しく説明を受け、ほんとうに助かったことをよく覚えている。

調査中の私の宿は、現場から歩いて15分くらいの所にある元善光寺で、その本堂の脇にある部屋で泊めていただくこととなった。ここの御住職さんが何と長野県考古学会委員の今村善興氏だと伺って驚いた。夕刻現場から戻って、お寺の玄関で初めてお会いし、夕食後も色々と教示いただき、荷が重いことを感じとった。

私が現場に参加して間もなく、小規模ながら掘立柱建物や緑釉陶片が出土するなど、普通の集落遺跡ではない官衙的性格の濃厚な遺跡であることがわかった。しかし、これまで見つかっている建物などに規格性が認められないことが、この遺跡の悩ましいところであり、この特色が、今でもこの遺跡の性格付けを困難にしているようだ。バイパス路線内の発掘調査だけでなく、周辺の民有地でも、遺跡の範囲を確認する調査も行われたが、なかなかしっぽがつかめないのが現状である。

現場での発掘調査が進むなか、県・市教委、国道事務所、下伊那考古学会等の遺跡保存を訴える団体との間で、恒川遺跡の性格や発掘調査後の遺跡保存に関して、話し会いがもたれていた。1982年には飯田市で、長野県考古学会主催による、シンポジュウム「地方官衙のあり方　―飯田市恒川遺跡群とその性格―」が開催され、全国から多くの研究者が集まった。この文を書くにあたって、手もとにある資料を見直すと　長野県考古学会　―恒川遺跡群保存対策特別委員会―『ごんが』No.4　今村善興編、木曽郡上松町神村透発行や、長野県考古学会刊『信濃考古』No.49・50　―恒川遺跡保存問題特集―　長野県考古学会会長　大沢和夫「恒川遺跡の保存運動について」ほか数報告がある。これらは現地でいただいたもののほか、今村氏からいつも手慣れた毛筆封書で奈良へ送ってもらったものも多い。私にとって恒川遺跡を通じて、つながりの深く、お世話になった、今村、笹沢両氏は昨年にお亡くなりになり、寂しい限りです。

恒川遺跡の調査はその後、奈文研では山中敏史氏に引き継がれたが、未だに正殿などを含む中心部が見当たらないが、正倉などの地域が2014年に国の史跡指定を受けて保存されている。りんご畑に囲まれた中での発掘がなつかしい。

奈文研では建築史の鈴木嘉吉所長が退き、田中琢氏が新所長となった。琢さんは1980年代から長野県教委の遺跡調査指導委員会委員を務めていたが、所長になって公務が忙しくなった為か、その役を私に引き受けてくれないかと頼まれた。私としては長野県の多くの調査員諸氏と以前から何かとつき合いがあり、また色々教示してもらうことも多く、その委員長を戸沢充則さんがされていることからすれば、断るわけは何もないので引き受けた。1995年初秋だったと思うが、県庁での初会に出席すると会のメンバーは、どなたも旧知の方々で、久々の対面であった。私が就任した当初の2年間は発掘現場を巡回することもなく。もっぱら会議室で「埋蔵文化財の取り扱いについて」。県内市町村における発掘担当者の採用状況や埋文関係予算の増額問題など難問が多く、戸沢委員長が苦慮されていることが読み取れた。樋口昇一・桐原健・丸山敞一郎さんは元職員だったから、適切なご意見を出してもらい、ずい分前に進んだと思う。

この委員会では2000年に入った頃から発掘中の遺跡視察を委員全員でおこなうことが多く、戸沢委員長とともに星ケ塔・星糞峠黒曜石原産地遺跡や飯田市竹佐中原遺跡の見学は特に印象深い思い出である。

2007年10月に長野県中野市柳沢遺跡で、県埋文センターの発掘調査によって、古式の銅鐸と銅戈複数本が、一土坑に埋蔵された状態で見つかったと言うニュースを、埋文センターの平林彰さんから受けた。信州で銅鐸の出土が増えることは予想はしていたが、越後に近い北信にまで達しているとは思っていなかったし、銅戈が供伴しているとは驚きであった。翌日また電話があり、銅戈の数は増えそうであり、数名の研究者からなる「柳沢遺跡調査指導委員会」を立ち上げ、笹沢浩さんにも参加してもらうので、私にも入って欲しいということであったので、喜んで受けることにした。’08年には柳沢遺跡のあと、長野市の自宅に泊めてもらい、奥様手作りの夕食をいただき、40年前の奈文研へ留学中の話など出て楽しい一夜だった。翌日は氏の運転で黒姫山、妙高山、を遠望しながら上越市へ向い、ご子息の正史さんが調査された吹上遺跡と、そこから出土した銅鐸型や戈形土製品を見せてもらった。そこで、北信柳沢への銅鐸を用いる弥生社会の発展した経路が、北陸経由である可能性を思った。

略　歴

1939年	兵庫県高砂市に生まれる
1958年	兵庫県立高砂高等学校卒業
〃	明治大学文学部史学地理学科入学
1964年	同　大学院修士課程修了
〃	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ入所
1969年	文化庁記念物課へ出向
1973年	奈文研平城宮跡発掘調査部第2調査室へ配属
1992年	奈文研飛鳥資料館　学芸室長
1995年	埋蔵文化財センター長
1999年	奈良国立文化財研究所定年退職
〃	（財）ユネスコ・アジア文化センター文化遺産保護協力事務所勤務
2001年～2021年3月	大阪府立狭山池博物館館長

隔月連載です。次回は山本暉久先生です。

リレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 246

西大久手古墳 ～愛知県名古屋市守山区

林　順

名古屋市の北東部、守山区の上志段味と呼ばれる地域は、東方は市内最高峰である東谷山、北方は庄内川により画された地域である。この東谷山の山頂・尾根から、庄内川沿いに発達した河岸段丘の縁辺部にかけては、古墳時代前期（4世紀前半）から終末期（7世紀）に築かれた様々な規模・墳形の古墳が展開しており、これらは志段味古墳群と呼称される。名古屋市教育委員会（以下、市教委）は、志段味古墳群の保存・活用のため、平成17年度以降継続的に調査を実施してきており、その成果に基づき、令和6年現在では古墳群中の6つの古墳と1つの古墳群（支群）が国史跡に指定されている。

今回紹介する西大久手古墳は、古墳時代中期（5世紀中葉）に築かれた、墳長約37.5mの帆立貝式古墳である。平成17～20年度には、市教委により発掘調査が実施され、くびれ部付近に配置されたとみられる須恵器のほか、東日本的特徴をもった形象埴輪（巫女形埴輪）などが出土している。市教委はさらに、本古墳の史跡への追加指定を目的として令和元～5年度にも発掘調査を実施しており、その成果は令和5年度末発行の報告書『志段味古墳群Ⅴ』にて報告している。以下ではその内容について紹介したい。

近年の調査で最も特筆すべき成果は、古墳の前方部の形状が全体的に明らかになったことであろう。特に、令和元年度の調査時に南側くびれ部で確認されたSD01は、造り出しを後円部と区分けする溝であることが明らかとなり、これまで確認されている須恵器や埴輪が造り出し上での祭祀に関わるものであることが強く推定されることとなった。また、前方部のほぼ全体を発掘したことで、前方部が前端部に向かって「ハ」の字状に広がる形状をなすことが明らかとなった。西大久手古墳のすぐ東に近接する東大久手古墳（5世紀末）が同様の形状をなすことから、西大久手古墳の墳形が規範となってその後の造墓活動が展開したと考えられる。さらに、本古墳は墳丘の上面が大きく削平されていることから、斜面に葺かれていた葺石の多くは周濠内に転落していたが、前方部の斜面の一部では石同士の隙間を空けた貼石風の葺石が原位置で確認された。このタイプの葺石の採用は全国的にも先駆けとなる例と考えられ、中期志段味古墳群の盟主墳である志段味大塚古墳（5世紀中葉）でもみられる。

令和元年度以降の調査で出土した遺物は埴輪のほか、須恵器、鉄鏃などコンテナケース計34箱分に及ぶ。調査・整理の過程で、埋葬施設には鉄鏃が納められていた可能性があること、須恵器には築造期（5世紀中葉）のもののほかに6世紀中葉のものも含まれ、築造後1世紀程度経過した後に墳丘上に須恵器が持ち込まれていることなどの新たな知見を得ることができた。一方、古墳の築造年代については従来通り5世紀中葉に位置づけられ、埴輪の組成からは、従来の「人物・動物埴輪を少数配置する古墳」（高橋2011）としての評価は揺るがないことも明らかとなった。

以上のように、近年の調査では従来の見解の一部を追認・補強するとともに、原位置を保った葺石の検出や鉄鏃の出土など、古墳を評価する上で重要な手がかりとなる新たな成果を得ることができた。志段味古墳群は前期以降の古墳の継続性がその特色として注目されがちであるが、西大久手古墳は前期以来、1世紀程度の古墳の空白期間を経たのちに突如として上志段味の地に出現しており、そのことの意味と、当時最先端の流行・要素（貼石風葺石など）が古墳に取り入れられていることとを考え合わせると、5世紀中葉になって地域首長が新たに台頭したことと、その台頭には王権による他律的意図が多分に関わっていることを読み取ることができよう。

また、当古墳では、令和元年度～3年度に市民を対象とした発掘調査体験も並行して実施しており、市民とも逐次調査状況を共有しながら調査を進めた。筆者はこの体験の準備・実施を通して、体験時の体制や広報の方法などはアップデートしていく必要があるものの、行政の役割が記録・保存に終始するものではなく、市民とその価値を共有し、市民に還元することにもあるということを改めて強く認識することができた。

遺跡の調査は、その大部分が開発行為により遺跡が失われることの代替措置としての「記録保存」のための調査であるが、西大久手古墳の調査は「残すことを前提とした調査」であり、現場である程度考える時間をもちながら調査に当たれたことは、経験の少ない筆者にとって幸運なことであった。ただ、そうはいっても発掘調査は破壊行為であることには変わりなく、調査者には綿密に記録を取る責任が付きまとう。残される遺跡、壊される遺跡の両者に目を配りながら、限られた時間・範囲・調査方法の中でなるべく多くの情報を掬い上げる方法を模索しつつ、今後も埋蔵文化財調査に邁進していきたい。

参考文献：

高橋克壽2011「形象埴輪と葬送祭祀」『古墳時代の考古学3　墳墓構造と葬送祭祀』同成社

名古屋市教育委員会2024『埋蔵文化財調査報告書98　志段味古墳群Ⅴ』名古屋市文化財調査報告115

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは二橋慶太郎さんです。

▲発掘調査体験の様子（令和3年度）

▲後円部で検出された貼石風の葺石

考古学者の書棚

「復元イラストでみる！　人類の進化と旧石器・縄文人のくらし」

工藤雄一郎 編／雄山閣（2022）

麻生　順司

はじめに

本書は、石井礼子氏の描いたイラストを中心に、考古学者の工藤雄一郎氏と人類学者の馬場悠男氏による解説で構成されている。石井氏のイラストは、国立科学博物館や国立歴史民俗博物館での企画展示等に多く用いられており、国立歴史民俗博物館の常設展示には私が調査を担当した神奈川県船久保遺跡で検出された陥し穴状遺構も陥し穴猟の状況や陥し穴にかかったシカを引き上げている復元イラストを描いていただいている。

このように本書には考古学と人類学の最新データを元にしたイラストがふんだんに用いられており、旧石器から縄文時代の状況を復元するという新たな解説書としてここに紹介したいと思う。

本書の内容

本書では、主に旧石器時代から縄文時代の人類の進化と生活環境の変化をイラストとそれに関する解説で構成されている。

まず、「Chapter1　人類の進化と顔」として人類の誕生と進化に伴う身体的な特徴の変化とともに頭骨から復元された人類の顔の変化がイラストで示されている。特に馬場先生による解剖学を元にした化石人骨の復元の指導により、各時代の人類の顔の特徴や体型の変化が細密に描かれており、ただのイラストではない奥深さが感じられる。また、日本人の各時代の顔や髪型の変化も描かれており、とても分かりやすい。

続いて「Chapter2　旧石器人のくらし」として日本の旧石器時代人の暮らしを中心に生活環境の復元や当時の動物相、そして生活道具となる石器の製作状況から使用状況までが分かりやすく克明に描かれている。また、黒曜石の原産地分析からの航海を含む人類の移動状況も示されていることは興味深い。

「Chapter3　縄文人のくらし」では、縄文時代の各期を代表する遺跡を元にその段階の生活状況が描かれており、縄文時代草創期では青森県の大平山元Ⅰ遺跡・東京都の前田耕地遺跡・北海道の大正3遺跡の調査成果を元に住居や漁労を含む狩りの様子が描かれ、その時期に沿った気候環境と服装にも注意が払われている。

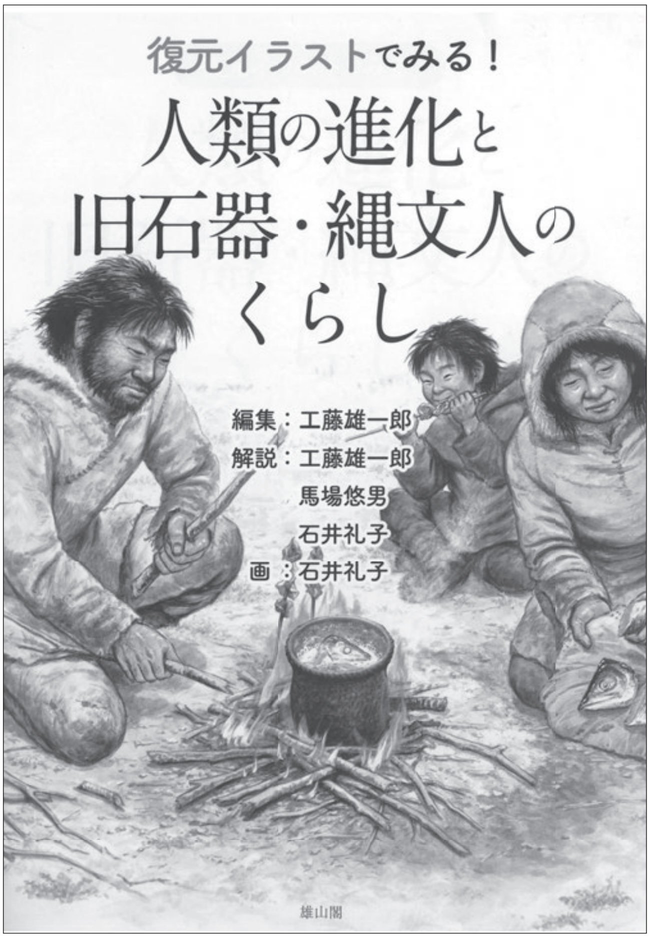
「Chapter4 その後の時代」では、弥生時代以降の生活と風習がまとめられており、弥生時代ではやはり稲作と環濠集落という外来文化が特徴的に描かれている。そして古墳時代から昭和までの情景や衣服の変化が各時代ごとに示されている。

おわりに

旧石器時代を専門とする私にとっていつも難しいと感じるのは、調査している遺跡の現地説明会や博物館などでの一般の方への講演などで、当時の環境や人々の行動を説明するのに非常に苦労することである。私たち世代では「ギャートルズの時代」といえばなるほどと思う方たちもいたが、現代では子供だけではなく、大人世代でも理解できない人たちの方が多いようである。

当時の人類がどのように生活し、旧石器から縄文そして弥生時代と移り変わる中で、回遊する狩猟採集経済から住居を持つ定住生活そして水田を用いる稲作というような生活様式の変化、さらに使用する道具の進化や人の骨格や顔つきの変化などを、現代の人々に遺物や遺跡発掘の写真だけで説明するのは不可能である。そうした中で本書の出現はこのような問題解決の大きな手助けになる書物と言えよう。

是非ご一読（御覧）ください。



アルカ通信　No.254

発行日　2024年11月1日
企　画　角張淳一（故人）
発　行　考古学研究所（株）アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15　TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp　URL：http://www.aruka.co.jp